

みなさまこんにちは。如何お過ごしでしょうか？

5月21日は宗祖親鸞聖人のお生まれになった日であり各寺院で「降誕会法要」が勤まります。当院も23日(土)に予定しております。どうぞお参りください。

さて、「降誕会」とはもともお釈迦様の誕生を祝うときにつかわれていた言葉だそうですがそれが後に日本で各宗祖の誕生日を祝うご法要にあてられるようになったそうです。この「降誕会」普通に「誕生会(たんじょうえ)」ではなく、なぜ「降誕(ごうたん)」なのでしょう？このことは、たまにご法話でも聞くことがあります。この「誕」という文字を調べてみますと領けるところがあります。「誕」という文字の意味には「むやみにひきのばしたそらごと」という意味が書かれています。確かに「言偏」に「延びる」と書いてありますが、どうも私たちの話している言葉にはそらごとがのびてゆく特徴があるそうです。それも「むやみにひきのばされる」ということです。

考えてみますと人の噂というものは、良い噂ならま

だしもどんどん広まっていくのは悪い噂の方が多いのではないのでしょうか？風評被害はその言葉の特徴がもたらす現象なのではないのでしょうか？

ある出来事が言葉を通して人から人へと伝わって行くのだんだんと「そらごと」になってそれが「ひきのばされてゆく」そして最初とはまったく違ったものになってゆく。実はこういう言葉の世界に生れ「誕生」したのが私たちなのだということです。今はインターネットというものがあ世界中の言葉が氾濫し、またラインなどは簡単に大勢の人とコンタクトが取れるようですが、これは使いようによっては大変便利なものですが、言葉がもっている「そらごとがのびてゆく」特徴を踏まえて活用しなければ、非常に恐ろしい道具にもなるのではないかと思います。この「誕」という文字の意味を考えておりますと、ふっと思ふことが「本当のことをよじ曲げながらなんとか生きているのはまさしく自分自身なのかなあ」と・・・

『歎異抄・後序』に書かれてある親鸞聖人のお言葉

に「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもってそらごたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とあります。

親鸞聖人のお言葉の特徴は「救われ難いのは私であり、この私を救ってくださるのが唯一阿弥陀仏(南無阿弥陀仏)のみ」というお立場にあります。

この「救われ難いわたし」という言葉の裏にはそらごとをひきのばし殺伐とした世界を造っている人間社会に対し警鐘を鳴らしているようにもあじわえます。

浄土真宗は南無阿弥陀仏(真実の言葉)の救いを聞かせていただく宗教です。

「降誕会」とはこのそらごとのことばの世界に真実の言葉をもたらせてくださった(降りて)きてくださった仏様に感謝させていただくご法要です。どうぞ一緒に南無阿弥陀仏のお救いの話を聞かせていただきましょう。 合掌